

日本保育学会において倉橋賞受賞

教育によつて発達はいかに促進されるか

——乳児期の発達と教育——

金 田 利 子

県立新潟女子短大
児童心理学ゼミナール



I 問題提起

△乳児教育の重要性△

近年、幼児教育の研究がすすみ、その重要性が、ひろく認識されつつある。これは、まことに喜ばしいことである。しかしに乳

児教育に関する研究と一般の認識は、それに比して、まだまだ立

ちおくれているようと思われる。今でも、乳児には静かで清潔な場所さえ与えればよく、教育（意図的はたらきかけ）など必要ではないと思われていることが多いのではないか。

しかし、発達の最も初期の乳児期は、やがて迎える幼児期、学童期それ以後とつづく発達過程の土台であるだけに、その教育もまた必要不可欠なのではないかと思われる。

△乳児の発達と乳児集団保(教)育△

一方、私たちの問題意識は現実の社会的課題からも触発されている。筆者自身、はたらく母であり、共同研究者たちもまたその候補生であるのだが、現在年々、共働きの家庭がふえ、乳児保育所の必要性がさけべれている。しかしながら、保育所の数が少なく、内容も充実しているとはいえない。だが、このことは別にもう一つはたらく父母にとって心配なことが出てきている。そ

れは乳児保育所は親の側から必要なのであって、子ども自身にとってはマイナスの面が多いのではないか、ということである。

このようなはたらく父母の疑問に正しく答えられるよう、子どもの側からみた乳児集団保育について十分検討してみることが必要なのではないだろうか。

そこで、私たちは、乳児期の発達と教育に関する研究を、乳児期の発達と乳児集団保育との関連の検討ということを念頭におきながら、すすめたいと考えた。

II 文献的考察

——私たちの仮説——

ここでは、今述べたような研究課題にもとづき、乳児期の重要性について明確にしている従来の研究の代表的なものにあたり、乳児の行動観察に学びながら、それらをもとに、乳児集団保育に関する私たちの仮説をみちびいた。

すなわち、(1)ボルトマンの人間一年早産説、(2)ヘップの知覚学習説、(3)ウソワやザボロジェツなどによるソビエトの感覺教育に関する研究の三者を関連的にとらえることによって乳児期の発達と乳児集団保育（教育）との関係にアプローチすることをこころみた。

(1) ポルトマンの研究と乳児期の重要性

ポルトマンの研究の内容については今ここで述べることを省略するが、彼の説の新しさは、比較形態学的な研究から、人間は、種として生理的に一年早産するのではないかという「人間一年早産説」をうち出し、さらに、このことの中にこそ、人間が人間になりうる秘訣があるのでないかという説を立てたことにあろう。

すなわち、他の動物が、母親の胎内という「自然環境」の中で、その中枢神経が成熟するのとちがい、人間は、「文化的社会的環境」の中に、より未熟のうちに生まれ、その影響のもと成熟する、というところに決定的な意味を見出した点にあろう。そして彼のこの説は、人間に特有である高等な行動も単なる生得的な本能の展開でなく、ごく初期からの模倣、努力、學習、訓練などによって獲得されたものであることを、系統発達的にあきらかにしている。

私たちは、このような人間の種としての特徴をとらえているボルトマンの説を、さらにすすめて解釈し、人間初期一年が発達にとってきわめて大切であればこそ、その時期に、よりよい「文化的社会的環境を、積極的に、計画的に用意すること（乳児教育）」の重要性をよみとったのである。

(2) ヘップの研究とボルトマンの研究の関連

発達初期の重要性について最近注目されているもう一つの研究はヘップの知覚学習説である。彼は発達初期の環境の与える知覚刺激の重要な性を動物実験によって実証した。

たとえば、「眼にとどく一定の光は制限せず、知覚だけが不可能になるよう半透明のビニール袋をかぶせて動物を育てると、光

を全く制限して育てた場合と同様の異常行動をとる」というよう

な一連の実験から、初期のパターンのある感覚刺激(=知覚刺激)の importance をあきらかにした。

一方、「広い飼育箱で育てた動物は、狭い箱による場合よりも迷路学習の成績がよく、かつ、飼育空間に挿入物(玩具)があるときはさらに成績がよい」というような一連の実験によって、五感に与える初期の総合的な知覚刺激である環境認知経験の重要性をあきらかにした。

以上のことより、私たちはボルトマンの「人間一年早産説」とヘップの「知覚学習説」との関連をつぎのようにとらえた。

ヘップの重視する初期に絶えず経験したパターンのある刺激の効果ということを、人間の場合について考えるなら、人間は他の動物に比して、人間特有の文化的社会的パターンのある刺激をごく初期から経験しているということになる。だからボルトマンの強調する人間初期一年の「文化的社会的環境」の重要性を、ヘッ

プの見解によって心理・生理学にうらづけることができると思。う。ここに両者の関連がある。異なるのは、ボルトマンが動物と比較して人間の特殊性を強調しているのに対し、ヘップは、動物でも人間でも、学習能力を養うには、初期のパターンのある刺激が不可欠であることを強調しているところである。

(3) ウソワやザボロジエツの研究と前者(ボルトマンとヘップ)の研究との関連

先にみたようなボルトマンの研究とヘップの研究から私たちが学んだことは乳児期の社会的関連ある感覚経験の重要性ということである。

一方、ソビエトの心理学者ウソワやザボロジエツもまた乳児期の感覚教育の重要性について説いている。そして彼らも、モンテソーリーシステムのように物の性質を物からぬき出して抽象的な形で理解させるのではなく、実生活をとおして、遊びや労働の中で理解させることの重要性を指摘し、社会性のある感覚教育こそ大切だと主張している。

このように両者は、社会性を重んじ、社会的関連(パターン・シクミ)のある感覚経験を重んじている点において共通している。

しかし、ソビエトの心理学者たちが、とくに強調するのは、感

覚経験を単に自然発生的ではなく、目的志向的、計画的に児童に与えることの重要性である。つまり感覚経験だけでなく、感覚教育の重要性を主張しているのである。

(4) 乳児集団保育に関する私たちの仮説

私たちは、以上三方面の研究から乳児期における人間特有の文化的社会的環境からの知覚刺激の必要性を知り、さらにその意図的な働きかけの大切さを知った。

これらのことにより、乳児集団保育についてつぎのように考察し、仮説を立てた。

乳児集団保育は、母親一人に家庭で育てられる場合よりも、社会的なパターンのある感覚刺激がより豊かである。現実に少なくとも、教育条件をどとのえることによって、そうすることが可能である。とくに子ども同士の交渉による社会的知覚経験を与えることは、家庭だけでは不可能であろう。

一方、乳児期には子どもとの対人関係は成立しないともいわれている。だがたとえ、現象的には、乳児同士の交渉が対人関係といえるようなものでなくとも、子ども同士接觸することの多い乳児集団保育の場面は、社会的関連のある感覚刺激がより多くあることは認めうると思う。そのような初期の社会的知覚経験は、現時点において乳児期の生活を豊かにするばかりでなく、その後の学習能力や社会性に効果があるのでないかと思われる。

このようにとらえると、乳児の発達にとつても乳児集団保育が必要であることを理論的にもあきらかにできる。

要約すると、私たちの仮説は、乳児集団保育の経験を初期の社会的知覚経験とともに、この経験は、その後の子どもの学習能力や社会性の上にプラスの効果をおよぼすであろうというものである。

私たちは、このような仮説をもとに、今後、長い目でみた乳児集団保育のすなわち乳児期の社会的知覚経験の効果を継続的に追求したいと考えている。

そこで、今回の保育学会では本研究をこれから的研究の第一回目のとりくみとして、位置づけて報告したわけである。

III 一 乳児の一年間の発達過程の観察から

△観察の目的△

私たちは一人の乳児の誕生直後から継続的に発達促進の方向で観察することにより、乳児の発達過程を自分たちの目で確かめたいと考えた。そして、そこから新しいことがらを発見し、従来の研究を検討し、乳児期の発達と教育の関連にアプローチしたいと考へた。

△観察の観点と方法▽

観察するにあたつて大切なことは、どのような方法で観察し、観察の結果を何によって評価(診断)するかという問題であろう。これはまた、観察者がどのように発達を理解しているかによって左右されてくる問題である。

乳児の発達過程について一般化されたものは種々ある。しかし、そのほとんどが、運動、社会性、情緒あるいは食事、排泄、あそびなど各領域別にその伸長を求めて、標準発達段階をあらわしているものであり、これらの関連についてのとらえ方が浅いように思われる。もつと中核的なとらえ方はないものだろうか。私たちは、発達に関する数多くの研究からこのような問題を感じていた。ちょうどその頃、第三十一回日本心理学会などの機会に「発達の中核的なはたらき」にとりくんだ近江学園グループの研究に出会った。私たちは「こから多くの示唆を得た。

この研究によると、発達とは、個人が上へ連続的に調和を追い求める中で、社会化していくのだと把握するのではなく、関係的な存在である人間が必要なくいちがいを消化して質的に転換していく中で豊かに個性化していくのだと把握している。そして発達を機能別、領域別にみる方法をとらずに、その「中核的なはたらき」ととりくみ、このはたらきは単に上へ延びるだけなく、各々の生活の場をとおして發揮されていくものであることをあきらかにした。

してきた。

さらに、中核的なはたらきを十分發揮させるには、單に子どもを生活習慣にあてはめるだけでなく「中核的なはたらき」が採取するのに適当なようく生活習慣を分析再構成していくことが必要だということを示してきた。そして外界とのとりくみにおける可逆操作特性をとらえる新しい診断法を生み出した。

私たちは、何とかして、このような中核的なはたらきを「乳児の観察からよみとりたい」と思った。

しかし、今回私たちは、この研究の生み出した方法を認めながらも、「自分たちの目で発達過程の観察を」という目標にそい、自然状況における子どもの行動観察をおこない、日々の行動のありのままを記述するという方法をとった。

そして領域別の発達段階を尺度とし、そこからどのような問題が出てくるかを問い合わせ、その中で、領域別診断の問題点がもしあるならどのような点にあらわれるかをあきらかにしていくことによって「発達の中核的なはたらき」ととりくんでいきたいと考えた。

そこで、私たちは観察の尺度として機能別、領域別の診断法という点では旧来のものとかわらないが、発達を生活全体の中でとらえた点においてきわめて新しく、学ぶところの多い津守、稻毛による乳児発達精神診断法を用いたことにした。

△観察の手続▽

まず、対象児について。対象児は、四十二年四月五日生まれの女児。出産時において、障害は受けず身長、体重などは標準よりやや大きく健康状態は概して良好である。

▼観察期日および場所について。

観察期日は対象児の生後二日目（四十二年四月七日）から生後九ヶ月目（四十三年一月五日）までの九ヶ月間を中心とし、その間、毎日一定時刻に一定時間（十分間）観察記録を行なつた。

観察場所は、主として対象児の家または、

保育ママの家であり、自然状況における行動

の観察を行なつた。

▼記録の方法について。

て。

筆記により時間（六

十秒）単位で記録する

方法を中心とし、これ

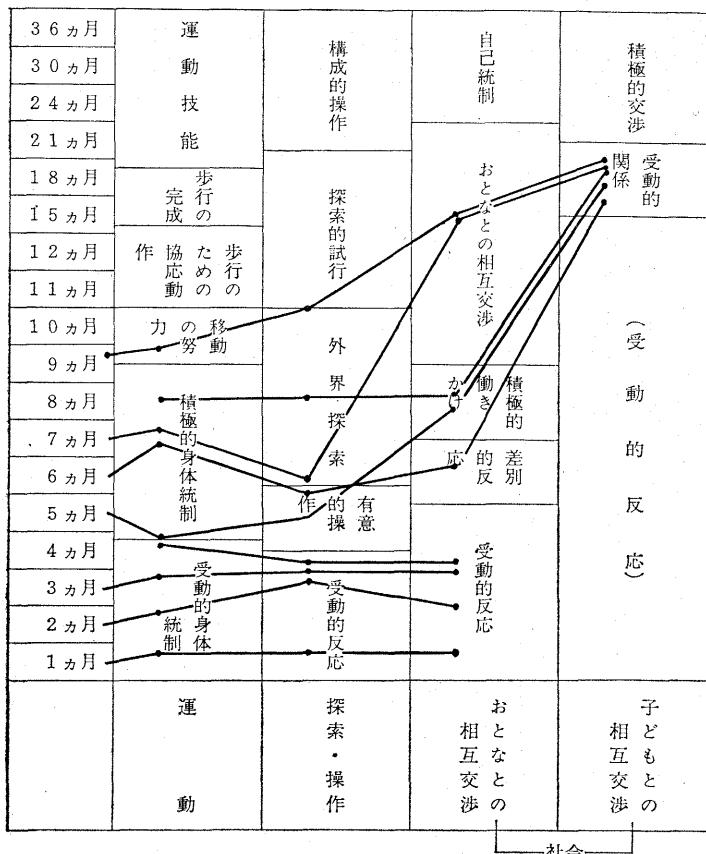
を補うために、カメ

ラ、ハミリにより観察

時の対象児の様子を記

録した。そのほか发声

はテープレコーダーによつて記録した。



注：子どもとの交渉の領域に（受動的反応）となっているのは、こちらで書き入れたものである。—受動的関係以前の乳児の子どもとの交渉の段階は空白であるより、その芽生えとなる時期なのではないかととらえ、こころみに（受動的反応）とした。

▼その他の参考資料

について。

観察法だけでは不備な点を補うため、質問紙法をあわせて用いた。すなわち、観察法だけでは、連日の観察ではあるけれども、一日一定時間という限界があり、行動の全体的把握ができないので、保育者に津守、稻毛による発達診断質問紙に答えてもらいうそれを参考資料とした。

△観察の結果と考察▽

「観察の観点と方法」の項で述べたような考え方方に立ち、観察記録の結果を、津守、稻毛による発達段階を尺度として検討した。

前頁の表は、この尺度（発達段階表）のもとに、観察記録を整理したものである。ただし、観察が一日の一定時刻のものであるため、津守らのあげた全領域について吟味することが困難だったので、食事、排泄、生活習慣については省き、運動、探索、操作、社会（おとなとの交渉、子どもとの交渉）の四領域に限ることにした。また理解、言語は興味深い分野なので、別の機会に考察することにした。

この表より、対象児の発達特徴について、検討するところのようないいえる。すなわち対象児は「運動」「探索操作」については多少のずれはあるけれども大体標準的な発達過程をたどっている。しかるに「社会」とりわけ、子どもとの交渉においては

著しい、発達の伸びを示しているということである。

私たちは一乳児の発達過程の観察から、この特徴、つまり「子どもとの交渉」の顕著な一般発達との差に問題を見出した。

一般に「一歳前の子どもは周囲の子どもが声をたてて遊んだり動いたりするのを見ても、ものとしての動きを楽しんでいるのであり、けんかがおこつても、それはただおもちゃを得るために非人間的な試みであって、子ども同士の交渉はほとんどみられず、乳児期以後にあらわれる」ととらえられている。

しかし、私たちの観察では、四ヶ月すでに乳児をみると、おとなを見る時と違った表情で喜ぶということ、七、八ヶ月で乳児と一緒にいるときの子の動作をじっと興味深く見ていたり、お互いに「アーハー」と声をかけたりする。歩行器にのっていると、自由に動きまわり、相手の歩行器に手をかける。また津守、稻毛らの標準によると一年すぎてから出でてくるとされ、一ヶ月（十二ヶ月までの質問紙からは省かれている、つぎのような行動も七ヶ月頃あらわれている。すなわち「鏡に興味を示し、笑いかけて鏡を相手に遊ぶ」「自分でピアノをたたいたあとおとなの顔をみてほめてももらいたがり、ほめると喜ぶ」「子どもの中にまじっていると一人できげんよく遊ぶ」などの行動は標準より五ヶ月早くあらわれている。標準はあくまで標準であり、個人差があるのが当然であろう。しかし、それにしても極端なひらきをみ

せているのはなぜだろうか。

その要因として考えられることの一つは、対象児の人的環境が豊富であることである。昼間あづけられている保育ママの家には五歳と九歳の女兒があり、対象児の世話をしたり一しょに遊んでくれている。またこの子たちの友人も多く遊びにくる。さらに対象児の家庭も学生など、子どもではないがおとなの中に入りが多い。また隣家には当時二歳の女兒があり、対象児はこの子を見る

と喜んで声をかける。

このような生育環境は特定の一母親から毎日養育されている乳児と比較して対象児の社会性（人との交渉）の発達を早め、そして豊かにさせている大きな要因ではないかと思われる。つまり、乳児期の「人との交渉」の発達は養育環境や養育者が意識的、無意識的に乳児に与えるものによる影響が非常に大きいのではないかと思われる。

私たちはこの観察より、乳児期であっても、乳児同士または乳

児と幼児が一しょにいる場があり、互いにはたらきかけあう機会がもたれるなら乳児と子どもの交渉は可能であり、一般に言わ

れているより、もつと早く社会性（子どもとの交渉）が発達するのではないかという示唆をうることができた。また、さきの文献的考察とあわせて、このような初期の社会的な刺激は後の発達にも効果をおよぼすのではないかと予想される。

そこで、私たちは一乳児から得たこのヒントをもとにし、ひろく一般的の乳児の対人交渉がどのようなものであるか吟味したいと考え、つきのような実験保育を計画した。

IV 乳児期の対人交渉に関する実験保育

私たちは、さきに述べてきたような意図のもとに、実験保育を二度行なった。実験Iでは、乳児の対人交渉の実態を知り、生育環境と対人交渉の関連について吟味することを目的とし、実験IIにおいては、実験Iで得た問題を手がかりに条件を統制して、乳児の対人交渉の過程を分析することを目的とした。

以下、実験I、IIのそれについて、手続き、結果等の報告を簡単に行なう。なお、実験Iは実験IIへの前段階的な意味をもつので、その結果については概略的に述べる。

▲実験I▽

▼手続き

①対象児・乳児（一歳未満、約九ヶ月児）四名（男一、女三）。幼児（一歳以上三歳未満児）五名（男二、女三）計九名。

②日時、場所、一九六八年一月二十一日、於県立新潟女子短期大学児童心理学実験室(52・5m²)。

(3)方法・乳幼児の集団場面をつくり、約一時間、全員を同時に実験室(保育室)に入れて実験保母一人とともに自由遊びをさせ、その行動を観察記録する。保育室には対人交渉の発展しやすいと思われるおもちゃなどを用意し、子どもが遊びに入りやすいようふんいきをつくつておく。観察は、対象児一名に一名の記録者がつつき、その行動を詳細に記述するという方法で行なう。なおその記述をおぎなうため、乳児の行動をカメラによって記録する。

一方、集団場面での行動と生育環境との関連を知るために、生育環境について、保育者に面接を行なって調査する。

▼結果と考察

実験保育Ⅰでみられた結果を概括的に述べる。①生育環境との関連・乳児期にも子どもとの交渉が可能であることが観察されたが、交渉をより多くもつ子どもと、もたない子どもの差が大きいという傾向がみられた。これを対象児の生育環境と比較すると、さきの一乳児の一年間の発達観察でみられたのと同じことが言える。すなわち、対象児の対人交渉のもちかたには三通りのタイプ(積極的、消極的、その他)があり、積極的な子どもは日常の人的体験も豊富であるという傾向がみられた。②乳児の対人交渉過程・乳児と子どもとの交渉はほとんど媒介物をとおして行なわれていることが観察されたが、おとなとの交渉はこの逆であつた。

△実験Ⅱへの課題▽

①乳児と乳児—乳児が自由に移動できる状態を設定しておく。すなわち、歩行器を乳児一人に一台用意し、移動可能なように、おもやは保育室の周囲におくようにする。(実験Ⅰではこの点が不備であったため、実験保育者が乳児同士を対座させた時にしか交渉がおこり得なかつた)

②乳児と幼児—乳児と三歳以上の幼児の対人交渉について吟味する。その際、幼児には、「乳児と遊ぶ」ということを動機づけておく。(実験Ⅰでは、幼児として三歳未満児を対象としたが、三歳未満の幼児の対人交渉は量的には乳児より増すが、質的には大差のないことがわかつた。また、実験Ⅰでは乳幼児を全保育時間中同時に遊ばせたため、乳児同士の交渉と、乳幼児間の交渉との差をあきらかにすることができなかつた)

③乳児と物—乳児の対人交渉と物との関係について再検討する。すなわち、物が対人交渉の媒介となる過程を吟味する。そのため、実験保育の過程において、意図的に玩具を一方の乳児にだけ与え、その反応を見る。(実験Ⅰでは保育過程の自然な流れを観察しただけなので十分に媒介過程の分析ができなかつた)

▼手続き▽

①対象児・乳児（一歳未満九ヶ月児）三名（男二、女一）、幼児

（三歳児）三名（女）計六名。対象児の選定条件・(i)被験者間に

兄弟など日常の相互交渉が行なわれてないもの（一人っ子）。

(ii)人数は、乳・幼児とも各三名。実験Iでは人数が多すぎた。三

名としたのはそれが対人関係の発展しやすい最小の単位と考えら
れるからである。(iii)幼児は三歳児とした。今回の実験では幼児と
して三歳児以上の子どもをえらぶことにした理由はすでに述べた
が、とくに三歳児に限ったのは、お姉（兄）さん意識の芽生えは
じめの年齢の子どもの場合を観察したいという意図からである。

②日時、場所：一九六八年、二月十一日、於実験Iと同実験室。
③方法：場面設定の留意点は実験Iに同じ。観察記録の方法は、
Iの場合不備を考慮し、時間を見本とした自由記述法による。

④実験の条件

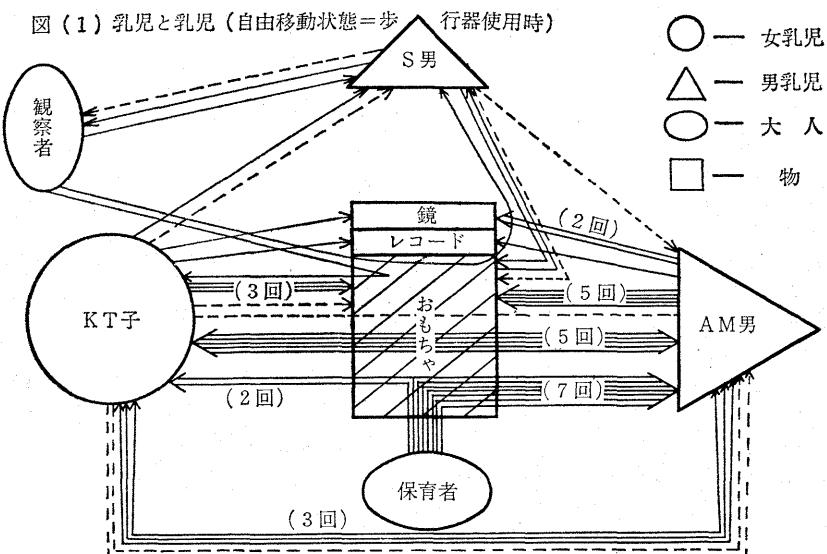
(i)乳児と乳児一はじめの二十五分間乳児を歩行器に入れる。そ
の後十五分間乳児同士を対座させる。

(ii)乳児と幼児一乳児が遊んでいるところへ、乳児と遊ぶよう
に動機づけられた幼児を入れ室させる（乳児が遊びはじめてから四十
分経過後）。動機づけは、幼児を入れ室前に観察室に入れ、乳児の遊
ぶのを見せておくという方法による。また口頭でも行なう。

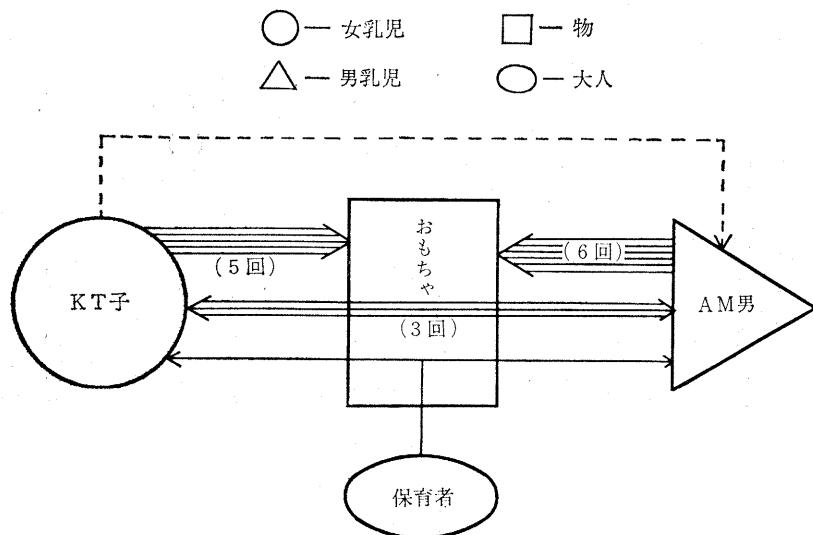
(iii)乳児と物一一方の乳児にだけ、他方から見えるところで玩具
を与える。これを二回以上行なう。

資料A（条件別対人交渉、関係・頻数図）

図(1)乳児と乳児（自由移動状態＝歩行器使用時）



図(2)乳児と乳児(対座の場合)



▼結果と考察

実験保育Ⅱの観察結果より得られたことを概括し、資料をそえる。

①乳児同士の交渉は、ほとんど、玩具など物を媒介として行なわれている。(図1・図2、記録例1)

②しかし、歩行器を使用して、自由に移動可能な状態をつくると、乳児同士の間でも、媒介物なしの交渉が可能である。(図1・記録例2)

③乳児と幼児が一しょになると、乳児同士の交渉が減少する傾向がある。(図1・2と図3とを比較参照)

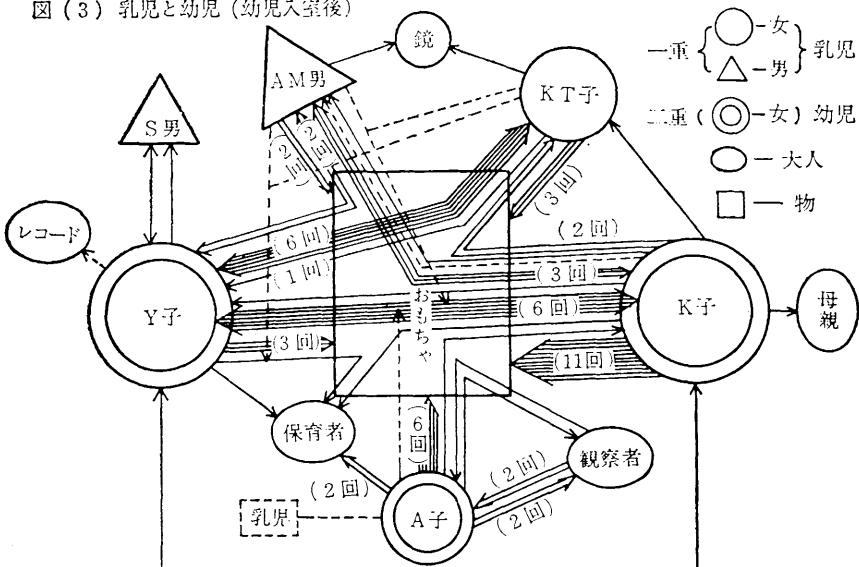
④幼児として三歳児をえらんだが、日頃集団生活(保育)を経験していない場合、三歳児は自己中心的であり、乳児に対して年長としての自覚ある行動をとりにくいが、保育者はたらきかけによつては、次第に自覚的な行動をとるようになることが可能である。

(記録例3)

資料B (行動記録例)

●記録例① (=歩行器使用中△図1▽の物を媒介とした二人の乳児の交渉過程より) ……保育者がT子にボールをわたす。T子落とす。M男は同時にころがるボールを追う。……M男の持っているガラガラをT子がとる。M男はグッグッと声を出してT子に近づく。T子はふる。M男はとろうとする。……保育者が音

図(3) 乳児と幼児(幼児入室後)



の出る自動車をひく。T子があとを追つていき、そのあとからM男がついていく。……保育者、M男にタンブリンをわたす。T子はM男からとろうとする。ひっぱる。M男は、ガガと声を出してしっかりとぎつている。……保育者が音の出る車をひく。二人とも一齊にみる。

●記録例②(歩行器使用中△図1△の物を媒介としない二人の乳児の相互交渉の過程より)……T子はM男を見る(二度)。……M男T子のところへいく。……T子はM男の方へいき右手で自分の歩行器をトントンたたく。

●記録例③(乳児と幼児の交渉△図3△の例)……保育者が、「赤ちゃんと遊んであげてね」という。Y子(幼児)はT子(乳児)に積木をなげてわたす。T子にぶつかる。T子泣く。保育者がY子に「赤ちゃんだからやさしくね」というと、T子にしづかにわたす(二回)。Y子が箱から積木を出すとT子がそれを持つ。箱の片方をS男(乳児)がつかむ。Y子は男の頭をなでる。S男の手をとつて握手する。M男(乳児)に積木をしづかにわたす(二回)。T子にガラガラをわたす。T子に積木をわたす(二回)。

①観察・実験保育などから総合して、私たちが得た主要な成果

V 総合考察

—今後の課題—

は、日常、集団保育をうけていない乳児にも対人交渉がみられるということがあきらかになったことである。

今後、私たちは「交渉」という行動が何であるか、もっとその質的側面を分析していかなければならないと思う。

また、実験保育でみられたことは、乳児保育の現場においてもみられるだろうか。乳児院や保育所における乳児の対人交渉の実態について、今後あきらかにしていかなければならないと思う。

さらに、社会的関連のある知覚経験としての乳児集団保育の効果については、乳児保育の現場における継続的観察によって研究をつづけていきたいと考えている。

②一方、この研究をつうじて、従来の発達診断テストの標準化は、階層は幅ひろくとられているが、多くは、乳児集団保育の経験のない乳児の場合からなされている。が、年々ふえていく乳児集団保育をうけている子どもを加えて再検討するなら、乳児期の社会性、とくに子どもとの交渉の発達など、その標準がもつと変わってくるのではないかという示唆を得た。

最近、私たちはこのことについて、ある保育園で乳児保育担当の保母さんたちに話したところ、口をそろえて、子どもとの交渉の発達については私たちの觀察した一乳児の場合があたりまえであって、一年以上たないと受動的関係が出てこない子はむしろ例外であるという。また、集団保育を経験している場合、二歳未

満児でも、友人や自分より幼い子どもに積極的ないたわりや友情を示すということを、この実験保育でみられた三歳児の行動と比較して報告してくれた。

このような問題をもつと幅ひろく調査していくことが、もう一つの、私たちの大きな研究課題である。

③この課題にとりくむなかで、さらに、発達の領域別をこえた「中核的なたらき」にアプローチしたいと考えている。たとえば、乳児期の対人交渉のうち、「おとなとの交渉」と「子どもとの交渉」の質的ちがいについて分析していく。「おとなとの交渉」は、生活習慣の形成において、また、それどきりはなせない、言語・理解の発達の方向へ、そして「子どもとの交渉」は、それを横へひろげる意味をもつてくるかもしれない。「このような考察を乳児教育の実践との係わりの中であきらかにしていくことである。

④最後にもう一つ、本研究から得たことは「解体保育」「混合保育」など、保育の方法を考える上で示唆である。これは実験保育Ⅱにおいてみられたのだが、「乳児と幼児が一しょになる」と、乳児同士の交渉が少なくなり、乳児が幼児のすることをじっとみるというような行動が多くなるという事実からの考察である。すなわち、解体保育のうち、年齢をも解体することは、発達の一上の段階（幼児）から乳児にはたらきかけ、乳児がそこから自然に学ぶためには、また幼児が、年少児への自覺的な友情を育てる

ためには、積極的な意味があるのではないか。ただし、それが長時間になると、乳児の側に主体性がなくなる恐れがでてくるのではないか、よって、時に、関係を発展させる上で教育的に考慮して、年齢を解体させるのがよいのではないか、ということが示唆された。

これについても、保育の実践に学びながらさらに検討していくたい。

参考文献

- ボルトマン 人間はどこまで動物か 岩波書店 一九六一
- ヘップ 行動学入門 紀伊國屋書店 一九六四
- 金田利子 発達における初期経験の効果 新潟女子短大研究紀要 一九六八
- 乳幼児教育との関連において—
- ザポロジエツ他 幼児の感覚教育 明治図書 一九六五
- ウソワ他 幼児期の感覚教育 新読書社 一九六七
- リュブリンスカヤ 幼児の発達と教育 明治図書 一九六五
- 津守真・稻毛教子 乳幼児精神発達診断法 大日本図書 一九六一
- 大阪・京都・滋賀「発達保障研究会」編 すべての子どもの発達権をかちとるために 一新しい心身障害児の発達と教育の理論 一九六六

○田中昌人他 一・二歳児のための保育の手引 「全障研」滋賀事務局 一九六七

○津守真・寺井直子「一歳児の研究」第二十回日本保育学会 (この他、津守研究室における実験保育の実際を見学)

付記

①発達促進の媒介物の研究のこと。

私たちは、観察や実験の過程で発達促進における「物」の媒介による大きいこと、とくに乳児の対人交渉の発達は「物」の媒介によって獲得されることを学んだ。私たちは、このような意味をもつ「物」（乳児にとっては、おもちゃ）について検討し、私たち自身でも、おもちゃの制作にとりくんだ。この内容について、ここで述べることは、紙面の都合で省略するが、このような面にも、乳児期の発達と教育の研究の一環としてとりこんできただことについて付記したい。

②共同研究者のこと。

この研究は、県立新潟女子短期大学の一九六七年度、児童心理学ゼミナールにおける、*八人の学生たちとの共同によるもので (*相場敏子、伊藤節子、川上美澄、久保田啓子、鴻巣典子、辻川紀子、野口弘子、本間しげ子)